

整備人材の創出

外国人技能実習生の可能性

□下□

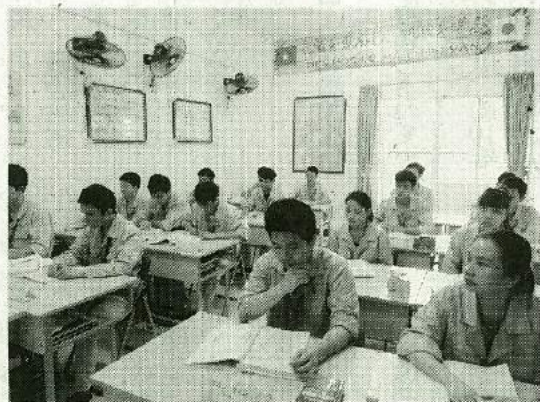
「日本人と話をすることを禁止されたのがさびしかったです」。ベトナムから技能実習生として来日し、数年前に帰国したフンさんの言葉だ。外国人技能実習生を「労働力として見ない」と起ころうることと送り出し機関のスタッフは語る。監理団体では相談窓口の設置や定期的な訪問などを行うが、受け入れ企業の理解がなければ継続運用は難しい。多様な人材の受け入れ、働き方改革の一環としても外国人技能実習生の制度は期待されている。

技能実習希望者の事情はそれぞれ異なる。ベトナムナムティンにある第20号短期大学(フアン・ホン・サン校長)で学ぶ学生の大半は農業を営む家庭で育

った。サン校長は「学生は日本で働く夢を持って技術の向上に取り組んでいる」と強調する。実際、技能実習生希望者の志望理由には「日本でお金を稼いで両親にあげたい」「両親に家を建ててあげたい」などが多かった。

彌生チーセル工業の細田健社長は「稼いだお金を開業資金に

課題は受け入れ企業の理解



LODの専門施設は全寮制で日本語や実技研修などを集中して学ぶ

LOD人材開発(フン・ティン・ティ・キム・スー・コン・ピン教育課長)という。一方、受け入れ団体のサポートも重要な。流通産業協同組合(山村洋行代表理事)では、受け入れ企業への定期訪問や相談窓口のほか、研修施設を茨城県内に設置し、約1カ月間は日本独自の文化や慣習、マナーなどを研修する。「失踪などのトラブルがないようにコミュニケーションを密に取りフォローして」と述べる。LOD(入江秀敏業務推進部長)。

ただ、実習生が最も関わるのサポート、日本語は受け入れ企業だ。働くスタッフ

コミュニケーションを密に取る

充てて、その利益を両親にプレゼントしたいと答えた人を選んだ」という。技能実習である以上、母国での生産性向上や事業の期待もある。

ベトナムの送り出し機関のL

るためだ。また、「目標がお金を稼ぐだけではない人は、技術を学ぶスピードも早いのでは」と

教育、技術指導、帰国後のビジネス支援などを行う。また、「日本語がわからなければ技術のアップも遅れる。だからこ

メカニクスを同行した。高橋社

の理解がなければ失踪などの事態を招く可能性もある。だいにち自動車(高橋仁嗣社長、堺市北区)は現地で面接に現場

現場スタッフの理解も重要

長は「一緒に働くスタッフに見極めてもらうのが一番大事だから」と理由を述べる。彌生チーセルも荒川俊之工場長が同行し面接にあたった。荒川工場長は「彼らが来日するまでに、ベトナム語で簡単な挨拶くらいはできるように準備したい」と会社全体で受け入れ体制を整えていく考えだ。

外国人技能実習生に自動車整備職種が追加されてから1年。今後はさらに増えることが想定されている。適切な労働条件の提示と運用、スタッフの理解、サポート体制の整備やコミュニケーションなど課題は山積するが「1年かけて準備して来年からは毎年採りたい」と(カートピアキチの菊池徹社長)という声もある。戦力の確保と社会貢献、働き方改革にもつながる制度として、仕組みへの理解と浸透が求められている。

(この連載は太田千恵が担当しました)